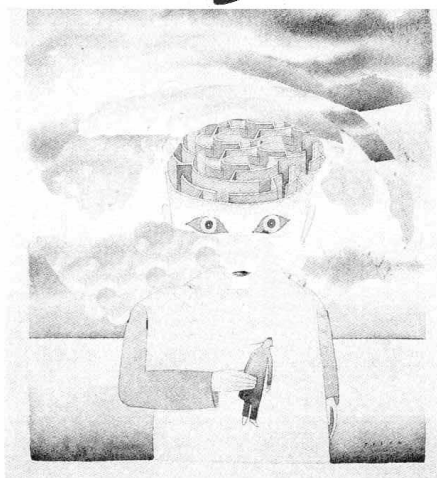


変身

東野圭吾



変身



東野圭吾

講談社

Jean-Michel FOLON : "L' ENFANCE" 1983

(c) SPADEM Paris & BCF Tokyo, 1990

変身

定価 一三五〇円(本体一三二・一円)
一九九一年一月十二日 第一刷発行

著者 東野圭吾

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽一―二―二 / 郵便番号一二二
電話 東京(〇三)三九四五―一一一(大代表)

印刷所 株式会社廣済堂

製本所 黒柳製本株式会社



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替いたします。なお、この本に
ついてのお問合せは、文芸局文芸図書第二出版部宛にお
願いたします。

© KEIGO HIGASHINO 1991 Printed in Japan

变 身

装幀 ● 安彦勝博
装画 ● フォロン

「堂元^{どうげん}ノート 1」

三月十日土曜日。

手術は無事に終了した。現在のところ異状は認められない。信号の乱雑化、過剰電流の発生なし。一分ごとのパターン記録と波形解析を継続的に行う。生体的拒絶^{拒絶反応}もなし。生命維持活動は順調に行われている。

広報担当者に最終報告。応援医師たちに感謝の意を述べる。記者会見の前に内線電話で学部長に報告。「あとは天命を待つ、だな」と学部長。まさにその通りだ。

計算上から、昏睡は数週間続くと見られる。その間は集中治療室にて観察。覚醒後は、意識形成の程度によりフレキシブルに対処する。担当には橘^{たちばな}助手を任命。

ドナーの遺体は縫合後、予定通り処理。記者会見で、ドナーについていくつかの質問を受けるが、倫理委員会での申し合わせを理由に一切拒否^{拒否}する。

現在夜の十一時半。間もなく十一日になる。長く、緊迫した一日であった。繋が^{つな}がれた回路は、無事作動してくれるだろうか。ホストの覚醒が待ち遠しく、怖い。

1

はじめはまだ夢の中を漂っている感じだった。だが次第に混濁した部分が去っていき、薄ぼんやり

とした闇だけが残った。そして僕の耳に音が蘇^{よみがえ}ってくる。遠くで風が吹いているような音だ。やがて何かの金属音。思わず頬をぴくりと動かした。

「今、反応がありました」

誰かの声がした。若い男の声だ。すぐそばに人がいる。なぜ見えないのだろうと思ったが、間もなく自分が目を閉じていることに気づいた。指先に毛布の感触。どうやら僕は寝ているらしい。ゆっくりと眼^{まなこ}を開いた。白い光が飛びこんできて眩^{くら}しい。細く開いたまま少し待ち、光に馴れてから改めて眼を動かした。

目の前に顔が三つあった。男が二人と女が一人。何か恐ろしいものでも見るように、緊張した目をしている。彼等は全員白衣を着ていた。ここはどこだ？

「我々の顔が見えるかね」彼等の中で最も年長と思える、髪が真っ白の男性が尋ねてきた。目尻から額にかけて無数の皺^{しわ}が刻みこまれていて、その上に金縁眼鏡をかけている。

見える、と答えようとした。だがうまく声を出せない。出し方はわかっているが、喉や唇が自分のものじゃないみたいに硬くなっているのだ。無理をして声を出そうとしたが、まずは唾^{つば}で喉を潤すのを先にすべきだった。声は声にならず、こんこんと無様な咳を漏らす羽目になった。

「無理をすることはない。頷^{うなづ}くか、首を振るかでいい」白髪の男性は、噛んで含めるような調子でいった。僕が瞬^{またた}きを二、三度してから頷くと、彼は安堵^{あんど}したように吐息をついた。「聞こえているし、言葉も理解できているようだ。それに目も見えている」

僕は息を吸いこむと、慎重に喉の加減を窺^{うかが}いながら口を開いた。

「ムム……は……どムム」

この一言はさらに彼等を元気づけたらしい。目を輝かせて、お互いの顔を見た。

「質問をしてきました。成功ですよ、先生」若くて顎の尖った男がいった。興奮しているのか、顔が紅潮している。

白髪の男性は小さく頷いてから僕の目を見た。

「ここは病院だよ。東和大学附属病院第二病棟だ。私のいつてる意味がわかるかね」

僕は小さく顎を引いた。それを確認してから彼は続けた。「私は君の手術を担当したドウゲンという者だ。ここにいる二人は、助手のワカオ君とタチバナ君だ」

彼の紹介に、顎の尖った男、若い女性の順で軽く頭を下げた。

「ぼく……は……なぜ……ここ……に？」

「覚えていないのかね？」

ドウゲンと名乗った男性に訊かれ、僕は目を閉じて考えた。長い間夢を見ていたような気がする。その夢を見る前はどうかだったのだろう。

「思い出せないなら無理することはないんだ」

博士がいった時、ふいに僕の脇の裏に人影が現れた。男だ。顔はよくわからない。何か持っている。それをこちらに向け、叫んでいる。いや、叫んでいるのは僕の方か。男の手が赤く光った――。

「銃……」僕は目を開けた。「ピス……ト……ル」

「そう、思い出したようだね。君はピストルで撃たれたのだ」

「撃た……れた……」もう少し詳しく思い出そうとした。だが、記憶に薄いボールがかかっているようだ。はつきりしない。「だめ……思い……出せない」

僕は頭を振ると、再び脇を閉じた。その途端後頭部が何かに引っ張られるような感触があり、直後に全身の感覚がふっと消えてなくなった。

「堂元ノート 2」

三月三十日金曜日。

ホストが覚醒した。言語中枢等、異状はないと見られる。ただし長時間の精神活動は困難な模様。記憶の欠落も予想される。覚醒後一分四十二秒で、再び睡眠状態に入った。

2

水の中に僕はいた。

僕は両膝を抱え、体操の選手のようにくるくると回っていた。頭が上になったり、下になったりする。しかし周りは薄暗いし、重力というものを全く感じないので、どちらが上でどちらが下なのかはわからなかった。水は冷たくも暖かくもなく、適度な温度に保たれている。回転を続けながら、僕は様々な音を聞いていた。地響きのような音、滝が落ちるような音、風の音、そして人の話し声。

気がつくと、僕は原っぱにいた。その場所のことを、僕はかすかに覚えている。小学校から南へ真っすぐ行ったところで、周りには古びた倉庫が立ち並んでいた。

僕たちは四人だった。近所に住む同級生で、皆でコオロギを捕りにやってきたのだ。僕がコオロギ捕りに加わったのは、この日が最初だった。

ところがコオロギはなかなか見つからなかった。昨日まではいっぱいたったというのだ。同級生の一人は、僕なんかを連れてきたからコオロギがいなくなっただけだった。後の二人も、そうかもしれない、今度からは連れてくるのをよそうかといいい出した。僕は草をかきわけながら、背中で彼等の話

を聞いていた。悔しかったが、いい返すことも、怒りを露わにすることも出来なかった。

その時突然僕の目の前に、黒い大きなコオロギが現れた。あまりに急なことで、僕は手を出す代わりに大声を出していた。コオロギは草の中に逃げこんだ。

同級生たちは、何があったのかと僕に訊いた。僕はコオロギを逃がしたことを彼等に責められなくなかったので、変な虫がいたのだといった。同級生は僕の顔を見て、嘘だろうコオロギがいたんじゃないのかといった。僕がかぶりを振って全然そんなのじゃなかったと主張すると、変な虫でもいいから捕まえろ、自分なんか百足を捕まえたことがあるとその同級生は自慢した。

その後はいくら探しても、コオロギは見つからなかった。そして僕が背丈の高い草の中から出ると、ほかの三人の姿は消えていた。僕の自転車が残っているだけだ。しばらく待ったが誰も戻ってこないで、僕は自転車に乗って一人で帰った。家では母が洗濯をしていて、コオロギは捕れたのと同じ。一匹もいなかったんだと僕は答えた。

映像はそこで曖昧になった。懐かしい家のイメージが崩れ、僕は再び水の中にいた。相変わらず何の力も感じず、自分自身が水の粒子になったような気さえする。

やがて身体回転が止まった。今まで静止していた水に流れが生じている。僕はその流れに乗って、移動を始めた。ものすごい速度だ。僕が流れの先に目をやると、白く小さな点が見えた。それが徐々に大きくなっていく。そして僕を包みこむほどになった時、その白い闇の端に何かあるのがわかった。目をこらす。それは机だった。そのすぐそばには椅子があつて誰かが座っている。その誰かは最初身動きひとつしなかったが、僕が見つめ続けていると、こちらを向いた。

「目が覚めたようね」

この声で僕の全身の神経が一斉に活動を始めた。カメラレンズの絞りを開くように周囲の光景が広

がっていく。椅子に座っていたのは女性で、僕を見て微笑んでいた。見たことのある女性だ。

「あなた……は？」と僕は声を出した。

「もうお忘れ？ タチバナです。ドウゲン教授の助手をしています」

「ドウゲン……ああ」

少し時間がかかったが、その名前を思い出すことはできた。夢と現実の区別がつきにくい状態だが、一度目覚めたのはたしからしい。その時にもこの女性に会った。

タチバナ助手は机の上のインターホンのボタンを押し、「先生、クランケが覚醒しました」と連絡してから、僕の枕の位置を直してくれた。「御気分はいかがかしら？」

「よく、わからない」と僕は答えた。

「何か夢を見ていたようだったけど」

「夢？ ええ……そう、子供の頃のこと」

しかしあれが夢といえるのだろうか。あれは過去に実際にあったことなのだ。自分でも驚くほど細部が鮮明で正確だった。それにしても、なぜあのことが記憶の中から蘇ったのだろう。今まで思い出すことなどなかったのに。

間もなくドアをノックする音がして、白髪の男性が姿を見せた。すぐに思い出した。ドウゲン博士だ。彼は僕を見下ろすとまず最初に、「私のことを覚えているかね」と訊いた。僕は頷いた。そしてあなたのことも、その横のワカオ助手のことも覚えていると答えた。博士は安堵したように小さく息を吐きだした。

「では、自分が誰かはわかってるかね」

「僕は……」名前をいおうとした。だが口を開きかけた状態で僕は停止した。自分が誰なのか、そん

なことは考えなくても答えられるはずなのに、それがすぐに出てこない。

突然耳鳴りが始まった。蟬しぐれのように断続的に襲ってくる。僕は頭を抱えた。「僕は……誰なんだろう？」

「落ち着いて、焦らなくていい」ドウゲン博士が、僕の両肩を持った。「君はかなりの重傷を負い、大変な手術が行われた。その結果、一時的に記憶が凍結されているんだよ。だから心を鎮めて待てば、氷が溶けるように記憶も蘇ってくるはずだ」

僕は金縁眼鏡の奥にある、博士のやや茶色がかった眸（ひとみ）を見つめ返した。そうしていると不思議に心が和らいでくる。

「リラックスするんだ。全身の力を抜いて」博士の声が飛んだ。ワカオ助手もいう。「焦らずに、息を整えて」

だが頭の中は真っ白だった。何もない。何も思い出せない。目を閉じて、深呼吸を繰り返した。ぼんやりと何かが浮かんた。それはアメーバのように形をさだめぬまま漂っていたが、徐々に形を成していった。

野球のユニホームだ。子供用のサイズでとても小さい。それを着た少年の姿を思い出した。あれは近所の同級生だ。コオロギと一緒に捕りにいった。その同級生が大きな口を開けて何かいっている。

「ジュン……」と僕は呟いた。

「何だって？」

「ジュン、名前だ……そう、呼ばれた」

博士が大きく身を乗り出してきた。

「そのとおりだよ。君はジュンと呼ばれている」

「ジュン……純金の純……一番の一」

その呼び名を中心に、いろいろなことが焙り出しのように浮かびあがってきた。古いアパート、古い机、そして古い時間。背の高い娘、ソバカスのある顔。彼女の名前は……メグだ。

頭痛がし始めた。僕は顔をしかめ、両手でこめかみを押さえた。手に包帯が触れた。何だ、この包帯は？

「あなたは頭を撃たれたのです」僕の意図を察したらしく、タチバナ助手がいった。この時彼女を見て、どこかで見たような顔だと思った。美人ではないが、外国の映画女優——名前は出てこない——に似ているといえなくもない。

「頭を……それで……助かった？」

「最新医学が君に味方したのだよ。それから幸運もね」ワカオ助手がいった。こちらは医者というよりも、銀行マンという感じだ。

僕は毛布の中で両手両足の指を動かしてみた。すべてきちんと揃っている。五体満足のようなだ。毛布の中から右手を出し、少し眺めてから、その手で顔を触った。ひどい傷があるわけでもなかった。銃弾を受けたのは、頭だけらしい。

身体を起こそうとした。ところが全身が鉛を埋めこまれたように重い。ちょっと力んでみたが、すぐに諦めて吐息をついた。

「まだ無理をしない方がいい」とドウゲン博士はいった。「相当体力を消耗しているはずだ。何しろ三週間昏睡状態だった」

「三週間……も」その状態が一体どういうものなのか、僕には想像がつかなかった。「ゆっくりと休めばいい」博士は毛布の上から、僕の腹のあたりをぼんぼんと軽く叩いた。「気長に、じっくりと回

復を待つことだ。焦る必要は何もない。君には充分な時間があるし、多くの人間が君の全快を祈ってくれている」

「多くの……ひと？」

「そうだ。世界中の人々が、といつてもいい」

博士がいうと、そばにいた二人も深く頷いた。

3

その後も睡眠と覚醒を、通常よりもかなり短いサイクルで繰り返した。博士によると、そうすることで僕の頭脳は少しずつ回復に向かつていくのだそうだ。そしてそれを証明するように、目覚めるたび、波がうちよせる如く記憶が蘇ってきた。

僕の名前は成瀬純^{なる せいゆんいち}。産業機器メーカーのサービス工場に勤めている。ユーザーからの苦情に對処したり、壊れた機械を修理したりするのが主な仕事だ。ライトブルーの制服。だが実際はオイルのためグレーに近い色に変わってしまった。職場での僕の譚名^{あだな}は、「お利口さん」だ。上司のことなら、どんなことでもはいはいとよくきくからだと先輩はいう。

土曜と日曜にはカンバスに向かう。絵を描くのが楽しみのひとつなのだ。昨年の暮れに、新しい油絵セットを購入した。

住んでいるのは、狭いワンルームのアパートだ。マンションなどという名前がついているが、あれはそんな代物^{しろもの}じゃない。マンションとかぎりは、炊事をするたびに片足だけサンダルを履かねばならないようなことはないはずなのだ。

アパート——。

そうだあの劣悪なアパートこそ、僕の身に起こった悲劇の元凶だ。僕はもう少しましな部屋を探しに近所の不動産屋へ行き、そこで頭を銃で撃たれたのだった。

あれはたしか午後五時より少し前だった。僕がその店を選んだのに、大した理由はない。外から見たところ、店員の愛想が良さそうに思えたからだ。厳めしい顔つきの男が出てきそうな店には、なるべく入りたくなかった。

中に入ると正面のカウンターで、若い女性客がその社員と話しているところだった。奥では五人の事務員が机に向かって仕事をしていた。男性が三人に女性が二人。

すぐ左を見ると、立派な応接セットが置いてある。そこでは白いカーディガンを羽織った品の良さそうな婦人が、この店の責任者と思える年配の社員と茶を飲みながら談笑していた。彼女はたぶん僕たちとは次元の違う相談をするために、ここを訪れたのだろう。

僕の前の若い女性客は長い髪をかきあげると、希望通りの物件がなかったのか、浮かない顔でカウンターから離れた。「いいものが見つかれば御連絡しますよ」と細い顔の男性社員がいうと、彼女は振り返って小さく頷き、店を出ていった。

「フジタ君、そろそろ表を閉めてくれないか」男性社員は僕の相手をする前に、誰かに指示した。丸い眼鏡をかけた女子社員が返事して立ち上がった。この店は五時で閉めるらしい。彼女は入り口の方へ歩いていった。

細い顔の社員は、営業用の笑顔を改めて僕に向けた。「お待たせしました」

僕はカウンターに近づくと、「部屋を探しているのですが」といった。

「どういった部屋ですか」

「ふつうの部屋と、食事をできるぐらいの台所があつて……」

「1DKですね」社員はじれったそうにいった。「賃貸ですか」

「そうです」

「場所はどこあたりをお考えですか」

「だいたいこのあたりを……駅から少し離れていてもいいんですけど」

僕がいい終わらないうちに、社員は横から分厚いファイルを出してきた。そこに物件が記載されているというわけだ。

「家賃は、おいくらぐらいまで？」彼はファイルをめくりながら訊いてきた。僕は今払っている家賃よりも少し上乗せした額をいうつもりだったが、ファイルの中を覗き見て言葉を飲みこんだ。そこにはそれよりもずっと上の金額が記載されていたのだ。

「御予算は？」僕が答えないので、社員は胡散臭^{うさんくさ}そうな顔をして訊いた。それで僕は思わず、予算をはるかに上回った金額を口にしていた。社員は表情を和ませて、ファイルをめくり始めた。

何をいつてるんだ、と僕は自分自身を叱責した。家賃を払えないような部屋を見つけたところで仕方がないじゃないか。早く訂正しなければ——しかしそれをする勇気が僕にはなかった。それをすれば、もっと妙な目で見られるに違いないのだ。

勧められた物件をどういう理由で却下するか、僕はそれを考え始めていた。何か適当なことをいつて引き上げるしかない。何のためにここへ来たのだろう。

やがて社員は適当な物件を見つけたらしく、ファイルを僕の方に向けた。僕は一応は興味のあるふりをして身を乗りだした。

そこへ彼が来た。

彼がいつ入ってきたのか、僕は気づかなかった。もしかしたらさっきの若い女性と入れ違いに入ってきたのかもしれないし、丸い眼鏡をかけた女子社員が表を閉める直前に飛びこんだのかもしれない。

彼は僕と社員の話を聞こうとでもするように、僕たちのそばに立った。年齢はよくわからない。僕と同じぐらいにも思うし、もう少し上かもしれない。ページュのレインコートを着て、色の濃いサングラスをかけていた。

社員は彼に、「少しお待ちください」とでもいうつもりだったのかもしれない。唇の動く気配があったからだ。だがその前に彼は行動を開始した。レインコートのポケットに入れていた右手を、徐々に出したのだ。その手には黒い塊が握られていた。

「騒ぐな、そのまま聞け」彼は抑揚のない、しかし非常によく通る声でいった。

店内の全員が注目したが、誰もが皆、彼が何を出して何をしゃべっているのか、咄嗟には理解できないようだった。もちろん僕もそうだが、最初から彼の行動を見ていた分、彼の右手に握られているものの正体に気づくのは早かった。

受話器を耳に当てている中年の女性社員がいた。彼は彼女に銃口を向けると、「電話を切れ、ただし自然に話すんだ」と命じた。女性社員は吃りながら一方的に話すと、受話器を置いた。

「窓のブラインドを下ろせ」彼は窓際の男性社員に命じた。社員は踊るような格好で、あわててブラインドを下ろした。表のブラインドは、すでに閉まっていた。

彼は僕を見た。「あんたは客だな」

僕は彼の手元を見ながら黙って頷いた。声を出せなかった。本物のピストルを目にするのは、これが初めてだった。黒光りした銃身は、強い説得力を持っていた。